

謎多き女帝・持統天皇

2021 年 11 月 25 日

我部山 民樹

1. はじめに

持統天皇（じとうてんのう、645 年～703 年 1 月 13 日、は日本の第 41 代天皇（在位：690 年 2 月 14 日～697 年 8 月 22 日）。皇室史上 3 人目の女性天皇である。諱（いみな）は鸕野讃良（うののさらら、うののささら）で、中大兄皇子（のちの天智天皇）と蘇我倉山田石川麻呂（そがのくらやまだのいしかわまる）の娘・遠智娘（おちのいらつめ）との間の娘である。

時代	歴代の女性天皇	在位した年	男系の系統	婚姻の有・無	即位前の身位(身分)
奈良時代以前	①第 33 代 推古天皇 すいこ	592 ～ 628	第 29 代 欽明天皇 きんめい	寡婦	皇后
	②第 35 代 皇極天皇 こうぎょく	642 ～ 645	第 30 代 敏達天皇 びだつ	寡婦	皇后
	③第 37 代 斉明天皇※ さいめい	655 ～ 661	第 30 代 敏達天皇	寡婦	すめみおやのみこと 皇祖母尊
	④第 41 代 持統天皇 じとう	690 ～ 697	第 38 代 天智天皇 てんじ	寡婦	皇后
	⑤第 43 代 元明天皇 げんめい	707 ～ 715	第 38 代 天智天皇	寡婦	皇太妃
	⑥第 44 代 元正天皇 げんしょう	715 ～ 724	第 40 代 天武天皇 てんむ	未婚	内親王
	⑦第 46 代 孝謙天皇 こうけん	749 ～ 758	第 45 代 聖武天皇 しょうむ	未婚	皇太子
	⑧第 48 代 称徳天皇※ しょうとく	764 ～ 770	第 45 代 聖武天皇	未婚	太上天皇
江戸時代	⑨第 109 代 明正天皇 めいしょう	1629 ～ 1643	第 108 代 後水尾天皇 ごみずのお	未婚	内親王
	⑩第 117 代 後桜町天皇 ごさくらまち	1762 ～ 1770	第 115 代 桜町天皇 さくらまち	未婚	内親王

657 年、13 歳にて叔父・大海皇子（のちの天武天皇）と政略結婚させられた。中大兄皇子が弟・大海皇子を囲い込むのが目的とされる。

662 年、草壁皇子を産む。

672 年、大海皇子が兵を挙げて勝利した「壬申の乱」で、大海人皇子と「ともに謀を定め」と「日本書紀」にあり、「壬申の乱」の計画に与ったことが知られる。

690 年、夫の第 40 代・天武天皇の崩御後しばらくして、飛鳥浄御原宮（あすかきよみはらのみや）にて即位し、持統天皇となる。694 年、天武天皇が執念を燃やしていた藤原京を完成させ、飛鳥浄御原宮から遷都した。日本史上初めての坊条制の都である。

○坊条制の藤原京（ジオラマ）



『日本書紀』に人物像は「深沈(しめやか)にして大度(おおきなりのり)有します」とある。「しめやかにして(沈黙は金！)大きな度量(太っ腹で度胸)がある」ということだ。

生い立ちは暗く、そのことがその後の生き方に影響を及ぼしたと思われる。

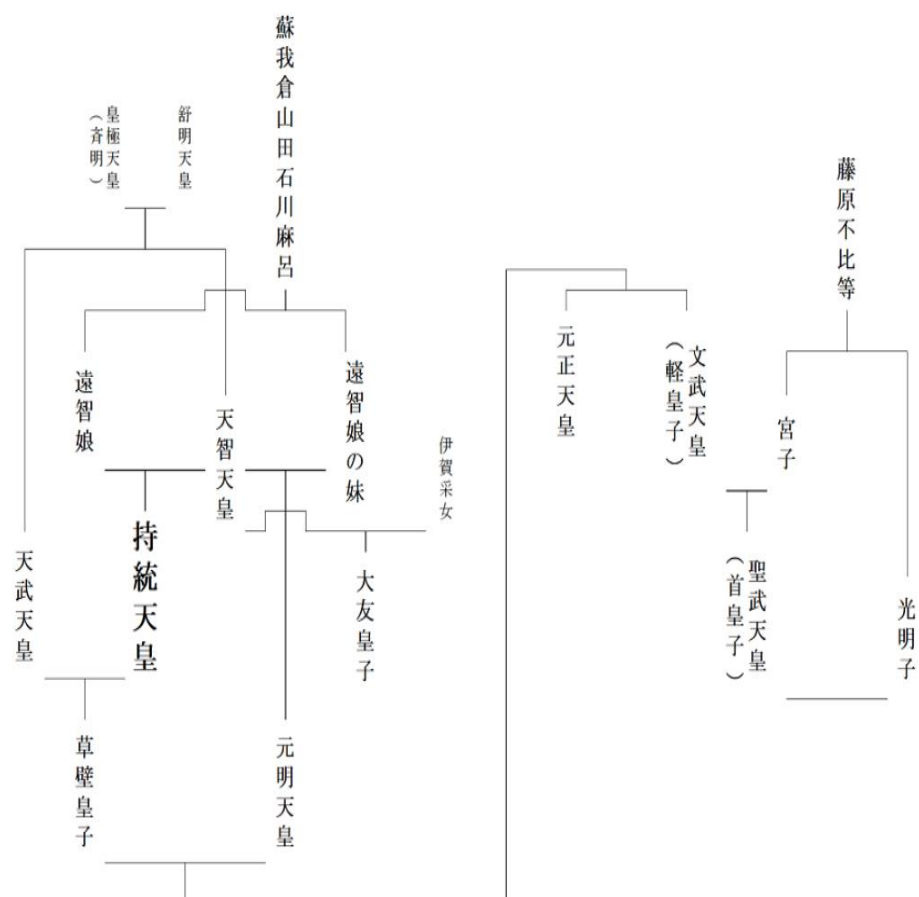
祖父・石川麻呂は父・大兄皇子(天智天皇)や中臣鎌足の起こした「乙巳の変」に加わり、蘇我入鹿(そがのいるか、石川麻呂の従兄弟)と蘇我蝦夷(えみし、石川麻呂の叔父)親子を倒した。が、その4年後(鸕野讃良が4歳のときに)、石川麻呂が蘇我日向(そがのひむか、石川麻呂の弟)の偽りの密告により父・中大兄皇子に無実の罪で滅ばされた。中大兄皇子と中臣鎌足に陥れられたとされる。最大の後ろ盾を失った上に、母・遠智娘は悲しみのあまり、亡くなってしまい、鸕野讃良は孤児のようにひっそりと生きざるを得なかった。少し後のことだが、父・中大兄皇子に近づいている蘇我赤兄(そがのあかえ、石川麻呂の弟)が孝徳天皇の遺児・有間皇子(ありまのみこ)を騙して死に追いやった。当然、鸕野讃良はこれらの出来事に父・中大兄皇子が関与していることを知っていたはずだ。

身内の謀略と裏切りにより、ちょっとした油断で粛清されてしまう陰謀の渦に巻きこまれ、妻子らが困窮してしまう厳しい状況に陥ることを身に染みて知っていた。そうならないように工夫を凝らす知恵と機先を制して迅速に実行できる胆力を兼ね備えていたので、勝者の側を駆け抜けることができたのだろう。

「持統天皇の謎」を解くための史料は、『日本書紀』であるが、『日本書紀』は日本で初めて国家が編纂した正式な歴史書で、天武天皇の命により681年から天智天皇の皇子・川島皇子以下12名によって編纂作業が開始され、720年に天武天皇の六男・舎人親王らが完成させたもので、天皇支配の正当性を主張するのが目的であり、当然ながら、天武天皇系の持統天皇、文武天皇(父：草壁皇子、

持統天皇の孫)、元明天皇(文武天皇の母)、元正天皇(草壁皇子の皇女、持統天皇の孫)の主導もあるだろうし、編纂者の忖度もあるので、当然、その記述には潤色や曲筆があり、あるいは都合の悪いことに蓋をしてしまったのは自明の理である。裏読みが必要となる。

○系図



- ・遠智娘の異母妹：姪娘（めいのいらつめ）
- ・元明天皇：阿閼皇女（あべのひめみこ）
- ・元正天皇：氷高皇女（ひだかのひめみこ）
- ・蘇我倉山田石川麻呂：蘇我入鹿の従兄弟
- ・蘇我日向：蘇我倉山田石川麻呂の弟
- ・蘇我赤兄：蘇我倉山田石川麻呂の弟
- ・宮子：藤原不比等と賀茂比売の娘
- ・光明子（安宿媛、後の光明皇后）：藤原不比等と橘三千代の娘

【同父異母兄妹や叔父と姪のような近親結婚は、富の分散を防ぐ有効な方法として、六、七世紀以降に王権中枢部から始まり、有力氏族の間でも繰り返行われていた。しかし、同父・同母兄妹の恋愛は現在と同じで厳しく制裁をうけた。】

詳しい系図については最後に添付した資料「天上の虹の登場人物系図」（里中満智子の著書：天上の虹「持統天皇物語」より）が分かり易いので、参照のこと。

「日本書紀」に鸕野讃良皇女（持統天皇）の政事への関与についての記述がある。

- ① 大海皇子（のちの天武天皇）が起こした『壬申の乱』のとき、皇后が「遂に与（とも）に謀（はかりごと）を定（さだ）む」とある。
- ② 皇后に就くとき、「皇后、始めより今に迄（いた）るまでに、天皇（すめらみかと）を佐（たす）けまつりて、天下（あめのした）を定めたまふ。毎（つね）に侍執（つかえまつ）る際（あひだ）に、すなわち言（こと）、政事（まつりごと）に及（およ）びて、たすけ補（おきぬ）ふところ多し」とある。

いかなる事実も知っている編纂者たちが、何を忖度して、また天皇らの検閲を経て、最終的にこのような表現になったのであろうか。皇后が単に政事に丈（たけ）ていたということだけではなく権謀家でもあるということだ。様々な出来事を裏読みすれば持統天皇の関与が際限なく広がってくるかもしれない。

日本史上、度々「何が何でも跡継ぎは最愛の我が子に！」という人物が現れ、手を尽くすが、必ずしも成功していない。が、その典型である鸕野讃良皇女は思いを見事に成功させたのだ。

先に天武天皇、持統天皇、文武天皇の後継決定の経緯を裏読みしてみる。

持統天皇は凡庸（皇子の幼少時にはそのように思っていなかったのだろうが）な我が子・草壁皇子を皇位に就けるべく知恵を絞り、あの手この手で草壁皇子を立太子させるために、計画を練り、実行した。

まず、鸕野讃良皇女は夫・大海皇子の即位と、自分が皇后になることを目論む。父・天智天皇が崩御すると大海皇子と共に「壬申の乱」を起こし、皇位継承者の大友皇子（鸕野讃良皇女の異母弟）を倒した。

天智天皇の皇后・倭姫王（やまとひめおおきみ）には子女がいなかったもので、身分の低い地方豪族出身の伊賀采女宅子娘（いがのうねめ・やかこのいらつめ）を母親に持つ大友皇子が皇位後継者になっていたのだ。

大海皇子と鸕野讃良皇女は過去の例にならい身分の低い地方豪族出身の母親を持つ大友皇子より天智天皇の同母弟・大海皇子（皇極天皇の皇子）に皇位継承の優先権があると考え、さらに鸕野讃良皇女は我が子・草壁皇子に皇位継承の優先権があると考え、「壬申の乱」を起こすように大海皇子に働きかけたのだろう。

諸皇族や諸豪族の多くが同じような考えを持っていたので大海皇子や鸕野讃良皇女の働きかけに応じた。勿論、近江朝の政治に対する反発（＊１）もあったのだろうが。とにかく「壬申の乱」は成功し、大海皇子と鸕野讃良皇女は勝者となった。

＊１． 近江朝への反発

- ・ 白村江への派兵を強行し、惨敗した。
- ・ 唐の侵略対策として、近江大津に遷都したが、飛鳥に住む諸皇族や諸豪族には不満だった。遷都のための負担を豪族や民衆に強いた
- ・ 国防施設を玄界灘や瀬戸内海の沿岸に築くために豪族や民衆に負担を強いた。

大海皇子が皇太弟だったとか、それを天智天皇に反故にされてしまったことへの反発とかのような話はクーデターの正当性を持たせるための曲筆の疑いもたれる。

大海皇子は天武天皇として即位し、鸕野讃良皇女が皇后となる。

天武天皇には 10 人の皇子（皇女は 7 人）がいた。我が子の第 2 皇子・草壁皇子を即位させるために、ライバルたちを排除することを計画し、実行に移す。

まずは、天武天皇に働きかけて「卑母拝礼禁止の詔」（自分の母親であっても、王の名を称していなければ拝礼してはいけないというもの）を発令し、母親が地方豪族の第 1 皇子・高市皇子を後継者候補から排除した。高市皇子は壬申の乱で著しい功績があったのだ。続いて 6 人の皇子（天武天皇 10 人の皇子うちの 4 人の皇子と天智天皇の皇子 2 人）と一人ずつに「吉野の盟約」を結んだ。‘異母兄弟同士は互いに助けあい争わない。天皇に逆らわない。’ということだ。そしてその順番は、①草壁皇子②大津皇子③高市皇子④川島（かわしま）皇子⑤忍壁（おさかべ、刑部）皇子⑥志貴（しき）皇子で、いずれ我が子・草壁皇子が皇太子に就くことを宣言した。

681 年、草壁皇子が立太子する。そして 683 年、有能な第 3 皇子・大津皇子が朝廷の政治に参加する。（立太子に曲筆の疑いが残るし、実際に立太子したが、その後それが実質的に消滅した可能性も否定できない。）

686 年 10 月 1 日、天武天皇が崩御するや否や間髪を入れず 10 月 25 日、ライバルの大津皇子に謀反の疑いをかけて排除した。皇子は自殺したとも処刑されたとも言われる。この事件で逮捕された共謀者が 30 余人で、そのうちの一人は伊豆に島流しになったが、それ以外は赦されたことから察すると謀り事と捉えるのが妥当であろう。

皇后が大津皇子の親友・川島皇子（天智天皇の第 2 皇子）から「大津皇子謀反の密告」を受けたとされるが、恐らく皇后が謀反の真実味を増すために川島皇子

を利用したのであろう。事件後、川島皇子は何の褒賞も得ていないので、一方的に密告者にされただけと見てよかろう。

大津皇子は皇后の同母姉・大田皇女の皇子で、草壁皇子と同等の皇位継承の資格があり、「日本書紀」に絶賛されているほど有能で、しかも天武天皇にも愛されていた。当然、有能な皇子を担ごうとする勢力があっただろうし、それを察知していた皇后が用意周到に準備し、先手を打って大津皇子を排除したのだろう。それにしても、あまりにも迅速で且つ鮮やかなやり方なので、皇后が権謀家であり、優れた政治的能力を持っていたことが窺える。

天武天皇崩御のあと、しばらくは称制（君主が死亡した後、次代の君主となる者（皇太子等）や先の君主の後が、即位せずに政務を執ること。）するが、草壁皇子が病で急逝する。すると幼い孫・軽皇子（母：持統天皇の異母妹・阿閉皇女）を皇位に就けんがために、多くのライバルを牽制するために自ら天皇に即位し、持統天皇となる。人望のある高市皇子を囲い込むために太政大臣に任命した。草壁皇子の急逝という不測の事態に際し臨機応変に対応したのだ。

696年、太政大臣・高市皇子が薨去する。持統天皇の次期天皇問題を皇族・臣下を集めて話し合った。「吉野の盟約」の皇子以外の天武天皇の皇子たちも成長し、その頃には後継候補の資格が整ってきていたのだ。その集まりで葛野王（かどののおおきみ、父：大友皇子）が「わが国では、天位は子や孫が継承してきた。もし、兄弟に皇位をゆずると、それが原因で乱が起こる。この点から考えると、皇位継承予定者はおのずから定まる」という主旨の発言をしたとされ、ここで第9皇子・弓削皇子が何か発言をしようとしたが（同母兄の第7皇子・長皇子を推薦しようとしたと推測される）、葛野王が叱り付けたため、そのまま直系の孫・軽皇子を皇太子にすることに決定した。あらかじめ、天皇が人を介して葛野王に因果を含めていたのだろう。

やがて計画通りに、軽皇子に譲位し、14歳の軽皇子が異例の若さで即位し、文武天皇となる。持統天皇は初の太上天皇（上皇）になって、譲位後も文武天皇と並び座して政務を執った。

持統天皇の治世の基本は、天武天皇の政策を引き継いで完成させるもので、飛鳥浄御原令（あすかきよみはらりょう）の制定と藤原京の造営が大きな二本柱であるとされる。

藤原京は夫・天武天皇が、天皇主権国家の樹立に向けて天皇の権力・権威を象徴する壮大な都を建設することによって人心を掌握することを目的に造営を開始したが、民の負担が大きいことを考慮し、一旦中断していたのだ。持統天皇が天武天皇の意思を継いで、再開したことになっているが果たしてそうだろうか。天武天皇の意思を継ぐならしばらく様子を見て、天武天皇が配慮した民力の回復を待ってからでも良かったのではなかろうか。持統上皇が民の負担を顧みず

造宮を継続したのは、藤原京遷都の共同発案者であり、諸皇族や諸豪族の掌握のために何よりも必要と考えたからであろう。694年、藤原京は完成し、遷都した。

持統天皇は吉野への行幸を度々行っていたが、701年にしばらくぶりに吉野に行幸し、「壬申の乱」の功臣に食封を与えた。死の直前の702年に三河国から尾張・美濃・伊勢・伊賀へと45日もかけて長旅をし、国司や郡司に禄を賜り、「壬申の乱」で功労があった地方豪族をねぎらった。謎の行動とされ、その意図が今一つ定まっていないが、自ら出向いて「壬申の乱」を勝利に導いてくれた地方豪族に感謝の意を形に表したかったのだろう。

持統天皇は孫・文武天皇の即位により念願をかなえた。が、蘇我倉山田石川麻呂系に妃に相応しい女性がいなかったため、697年に台頭してくる藤原不比等の娘・宮子が文武天皇の夫人となっていた（文武天皇の乳母の橘三千代が不比等の妻となり、その働きかけだったとされる）が、701年に宮子が首皇子を産んだ今、不比等が天皇の外戚として権勢を高めることが明白になり、蘇我山田石川麻呂系の持統上皇が対抗上、功臣の豪族たちを引き締めることが主目的だったと考えられる。しかしそればかりでなく、功臣の豪族たちの支援があったからこそ天武・持統天皇政権が樹立・維持できていると認識し、心から感謝していたのは間違いないだろう。

702年12月13日、持統上皇は長旅の疲れによるのか、病を発し12月22日に崩御する。享年58。

持統上皇はあの手この手を行行使して、このようにライバルを蹴落とし、遂には孫・軽皇子を皇位に就けることに成功した。並外れた政治的能力を有していたのだ。

この仮説を否定できる要素が見つかるかどうかを検討する。

持統天皇があらゆる手段を講じてでも我が子を天皇にしようと思い立ったとしたら、それは何時頃だったのだろうか？早ければ、草壁皇子を産んだ後、大津皇子の母親の同母姉・大田皇女が死没した頃かもしれない？遠大な計画だ。

仮説に基づいて持統天皇の謎を解くには次の七つのポイントがキーになる。

① 「壬申の乱」の主導的な役割を果たしたのかどうか？

夫・大海皇子に働きかけて、異母弟・大友皇子を倒し、夫・大海皇子を即位させ、自分が皇后になる。

② 「卑母拝礼禁止の詔」を発令して、母親が地方豪族の第1皇子・高市皇子や他の皇子を後継者候補から除外する。詔を発するように天武天皇を唆した？

③ 6人の皇子と天武天皇および皇后との「吉野の盟約」で天武天皇の次男で皇后の唯一の皇子・草壁皇子を次期天皇であると皇子たちに宣言した。皇后が天武天皇を唆したのだろうか？

飛鳥浄御原宮跡（飛鳥板蓋



○藤原京位置図

藤原京



飛鳥浄御原宮跡

3. 年表

年度	主な出来事
645 年	鸕野讃良が中大兄皇子（のちの天智天皇）と蘇我遠智娘（蘇我倉山田石川麻呂の娘）の第 2 皇女として誕生
645 年	7 月、中大兄皇子と中臣鎌足による「乙巳の変」が起こり、蘇我宗本家の蝦夷と入鹿親子が滅びる。石川麻呂はこの変に参加。
649 年	蘇我日向（石川麻呂の弟）の偽りの密告により、蘇我倉山田石川麻呂が滅ぼされる。
657 年	13 歳の鸕野讃良皇女が叔父・大海皇子と結婚する。
658 年	有間皇子（孝徳天皇の皇子）が蘇我赤兄（石川麻呂の弟）に騙されて死に追いやられる。享年 19
661 年	・阿閑皇女（草壁皇子の妃、のちの元明天皇）が生まれる。 ・8 月、斉明天皇が崩御 ・中大兄皇子が称制を執る。
662 年	草壁皇子が大海皇子と鸕野讃良皇女の皇子として誕生。
663 年	大津皇子が大海皇子と大田皇女（鸕野讃良皇女の同母姉）の皇子として誕生。
668 年	中大兄皇子が即位し、天智天皇となる
672 年	1 月、天智天皇が崩御
672 年	7 月、大海皇子が決起して「壬申の乱」が勃発。大友皇子が敗死する。大海皇子が即位し、天武天皇となり、鸕野讃良皇女が皇后となる。
679 年	「卑母拝礼禁止の詔」を発令する。4 カ月後「吉野の盟約」を交わす。
680 年	氷高皇女（草壁皇子の皇女、後の元正天皇）が誕生
681 年	・2 月、草壁皇子が立太子する。 ・天武天皇の命により、「日本書紀」の編纂作業が開始される。 ・天武天皇が律令制定の詔を発す。
683 年	・2 月、大津皇子が朝廷の政治に参加 ・草壁皇子の皇子・軽皇子（のちの文武天皇）が生まれる。
686 年	7 月、天武天皇の勅により、皇女と草壁皇子が共同で政務を執るようになる。
686 年	・10 月 1 日、天武天皇が崩御。

	・10月25日、大津皇子が謀反の疑いをかけられて死に追いやられる。そして鸕野讃良皇后が称制する。
689年	・4月、草壁皇子が崩御する。享年27 ・6月、飛鳥浄御原令を公布（律は定められず）
690年	・2月、皇女が即位し持統天皇となる。 ・一旦頓挫していた藤原京の造営工事を再開
694年	藤原京に遷都
696年	7月、高市皇子が薨去
697年	2月、軽皇子が皇太子となる。
697年	8月、持統天皇が15歳の軽皇子に譲位し、太上天皇となる。皇子は即位し文武天皇となる。藤原不比等の娘・宮子が文武天皇の夫人（ぶにん）になる。
701年	・藤原不比等が立案した大宝律令が制定される。不比等が大納言に任じられる。 ・宮子が首皇子（おびとのおうじ）を出産する。 ・持統上皇が、しばらく絶っていた吉野行きを行う。
702年	・持統上皇が三河国まで足を伸ばす長旅に出て、壬申の乱で功労があった地方豪族をねぎらう。 ・12月、持統上皇が病を発し、崩御。
707年	文武天皇が崩御し、元明天皇（阿閉(あべ)皇女、草壁皇子の妃、持統天皇の異母妹）が即位する。
708年	不比等が右大臣となる。
710年	平城京遷都
715年	文武天皇廬皇子・首皇子（おびとのみこ）が幼かったため、元明天皇は娘の氷高皇女に譲位し、太上天皇となる。皇女は即位し元正天皇となる。
716年	不比等と橘三千代の娘・安宿媛が首皇子の皇太子妃になる。
720年	「日本書紀」が完成する。
724年	首皇子が即位し、聖武天皇となる。

4. 持統天皇の生涯（通説による。）

持統天皇と言えば、万葉集の歌で有名だ。

【「春過ぎて夏来（きた）るらし白（しろ）たへ（え）の衣干したり天（あめ）の香具山（かぐやま）」の歌。百人一首にある、この歌の解釈はいろいろあるようだが、「初夏、田植えの時期を迎えて、村の娘たちが早乙女（田植神事の主役）の資格を得るために、山に入って物忌み（ある期間中、日常的な行為をひかえ穢れを避けること。）のお隠

（こも）りをしている。衣はその娘たちの斎服であり、早苗を田に植える夏がいよいよ来た。」に納得がいく。普段、香久山に白衣が干されているはずがないが、このような風習があったのなら合点がいく。「天武天皇について愛息草壁皇子を失った悲しみを喪服から斎衣に替え、新たな政務に取り組もうとする持統の並々ならぬ決意」を表している歌と読み替えるべきとする説もある。】



のどかに感じるこの歌からは、平穏な暮らしぶりが窺がえ、平和な時代のように感じるが、実際は、近親結婚を繰り返した皇族や諸豪族の後継争いや権力争いで、お互いに姻戚関係のある皇族と諸豪族たちの謀略と裏切りにより、ちょっとした油断で粛清される厳しい時代だった。

推古朝、皇極朝にもそうだったように血なまぐさい惨劇が何度も繰り返されたが、そんな中で持統天皇は、勝者の側を駆け抜けたのだ。類まれな政治的資質を備えていた女帝と言えるだろう。

4-1. 誕生から「壬申の乱」まで

父親は天智天皇（てんじてんのう、中大兄皇子）、母親は遠智娘（おちのいらつめ）といい、その第2皇女である。母方の祖父が蘇我倉山田石川麻呂（そがのくらやまだのいしかわまろ）である。

その暗い生い立ちを知ることから始める。

657年、13歳で叔父の大海人皇子（おおあまのみこ、後の天武天皇）に嫁した。中大兄皇子は彼女だけでなく第1皇女・大田皇女（おおたのひめみこ、母；遠智娘）、第6皇女・新田部皇女（にいたべのひめみこ、母；橘娘）、第8皇女・大江皇女（おおえのひめみこ、母；色夫古娘（しこぶこのいらつめ））の娘4人を弟の大海人皇子（おおあまのおうじ）に与えた。これを一例に天智・天武の両系は近親婚によって幾重にも結びあわされていた。

661年、鸕野讃良皇女は夫とともに天皇に随行し、九州の筑紫国まで行った。

662年に筑紫国の朝倉橘広庭宮（あさくらのたちばなのひろにわのみや）で草壁皇子（くさかべのみこ）を産み、翌年に大田皇女が大津皇子を産んだ。667年以前（天智天皇の即位前）に大田皇女が亡くなったので、鸕野讃良皇女が大海人皇子の妻の中でもっとも身分が高い人になった。

4-2. 壬申の乱

671 年、大海人皇子が政争を避けて吉野に隠棲したとき、草壁皇子を連れて従った。『日本書紀』などに明記はないが、大海人皇子の妻のうち、吉野まで従ったのは鸕野讃良皇女ではなかったかとされる。

672 年、大海人皇子は決起して「壬申の乱」を起こした。鸕野讃良皇女は草壁皇子と忍壁皇子（おさかべのみこ）を連れて、夫に従い、吉野から直領地のある美濃国に向けて脱出する強行軍を行った。疲労のため大海人一行と別れて伊勢国桑名にとどまったが、『日本書紀』には大海人皇子と「ともに謀を定め」たとあり、乱の計画に与（あず）かったことが知られている。

直領地のある美濃を基盤にして挙兵して反乱をおこした。天武の作戦指導が適切であったことと、宮廷内部にも地方豪族にも天武に同調者の多かったことにより、反乱は成功し、約 1 ヶ月のちに近江宮は落ち、大友皇子は自殺した。（処刑されたとの説もある。）反乱者である大海皇子が勝利するという、日本では例を見ない内乱であった。

勝利を収めた大海人は同年 8 月、大和の飛鳥へ帰り、浄御原(きよみはら)の新宮に入った。天皇主権の樹立に向けての大事業を次々と打ち出した。その一つが藤原京の建設だった。

○乱の原因

通説では皇位継承紛争、白村江の敗戦、額田王をめぐる不和説がある。

その概要は以下である。

・皇位継承紛争

天智天皇が旧来の同母兄弟間での皇位継承の慣例に代わって唐にならった嫡子相統制（すなわち大友皇子（弘文天皇）への継承）の導入を目指すなど、かなり強引な手法で改革を進めた結果、同母弟である大海人皇子の不満を高めていった。当時の皇位継承では母親の血統や后妃の位も重視されており、皇位を継ぐ資格の一つとして、母が皇族出身者であることが当然のごとく思われていた時代だから、母が地方豪族の娘であった大友皇子が皇位を継ぐとは誰も思っていなかった。

天智天皇の血を引く鸕野讃良皇女（のちの持統天皇）は夫・大海皇子に皇位継承権があると考えると同時に我が子・草壁皇子の皇位継承を強く望み、大海皇子のみならず持統天皇が諸皇族や諸豪族に働きかけたとしても決して不思議ではない。

天智天皇の第 1 皇子ながら身分の低い地方豪族出身の伊賀宅子娘の子である大友皇子はそれが弱点となっていた。これらを背景に、大海人皇子の皇位継承を支持する勢力が形成され、絶大な権力を誇った天智天皇の崩御とともに、それまでの反動から乱の発生へつながっていったとみられる。

それまでは同世代がいる場合には兄弟間で行われていた皇位継承を、天智天皇は弟の大海人皇子がいるにもかかわらず、後継を我が子・大友皇子にと考えたのが事の発端とされている。最初は皇位を弟・大海皇子に譲るつもりだったが、我が子の成長を見るにつれ、次第に考えが変わったようだ。

・白村江の敗戦

天智天皇は即位以前の 663 年、百済の復興を企図して朝鮮半島へ出兵し、新羅・唐連合軍と戦うことになったが、白村江の戦いでの大敗により百済復興戦争は大失敗に終わった。そして倭は唐による侵略の危険にさらされることになった。当時の国力の差にかんがみると、仮に唐が侵略してきた場合には、国の主権そのものが脅かされかねない状況であった。倭における事実上の国家統治者だった中大兄皇子は、まず防御を固める方針を打ち出す。

中大兄皇子は、それまで飛鳥にあった都を大津に遷した。これは敵に攻め込まれた場合に、大津宮の方が防衛上有利だったからだ。しかし、急な遷都に飛鳥に住んでいた人々は猛反発し、その不満は後の「壬申の乱」の遠因の一つとなったと考えられる。（遷都は大友皇子に皇位を継承させる目的もあったとの説がある。）

・額田王をめぐる不和

古くは額田王（ぬかたのおおきみ）をめぐる天智天皇と大海人皇子との争いに注目する説もあったが、現在では政治的な面が重視され、皇位継承の問題を直接の原因とし、大化改新以来の天智の政策に不満をもつものが多いことも原因の一つとするのが一般的である。

4-3. 天武天皇の皇后

673 年、天武天皇（てんむてんのう）が即位し、鸕野讃良皇女が皇后に立てられた。『日本書紀』に「皇后、始めより今に迄（いた）るまでに、天皇（すめらみかと）を佐（たす）けまつりて、天下（あめのした）を定めたまふ」とある。天皇の詔や決定に皇后の意向がかなり組み込まれていたと推測される。

679 年、「卑母拝礼禁止の詔」を発令する。簡単に言えば「諸王は、自分の母親であっても王の名を称していない者へは拝礼してはいけない。正月だけではなく普段からしてはいけない。違反者は罰する」というもので、母親が豪族出身の第 1 皇子・高市皇子がこれに該当し、皇后が高市皇子を皇位継承者から排除するための手段に定めたとされる。その 4 カ月後、天武天皇と皇后が 6 人の皇子と、異母兄弟同士は「互いに助けあい争わない。天皇に逆らわない」という「吉野の盟約」(*2) を交わした。天武天皇には 10 人の皇子がいるが、そのうちの第 2 皇子・草壁皇子、第 3 皇子・大津皇子、第 1 皇子・高市皇子、第 4 皇子・忍壁皇子（刑部皇子）の 4 人と天智天皇の皇子の川島皇子、志貴皇子の 6 人との盟約

である。天武天皇は皇子たちに互いに争わずに協力すると誓わせ、彼らを抱擁した。続いて皇后も皇子らを抱擁した。その順番は、①草壁皇子②大津皇子③高市皇子④川島（かわしま）皇子⑤刑部（おさかべ）皇子⑥志貴（しき）皇子。年齢順だと高市皇子がトップに来なければおかしいのだが、高市皇子は母親の身分が低いからだろうか、3 番目だった。

最初に草壁皇子に誓わせ、その後一人ずつ順番に誓わせて、次期天皇は草壁皇子と宣言するのが目的だったとされる。

685 年頃から、天武天皇は病気がちになり、皇后が代わって統治者としての存在感を高めていった。686 年 7 月、天皇は「天下の事は大小を問わずことごとく皇后及び皇太子に報告せよ」と勅し、皇女と草壁皇子が共同で政務を執るようになった。

『日本書紀』によれば、天武天皇の在位中、皇后は常に天皇を助け、そばにいて政事（まつりごと）について助言したとある。

*2. 「吉野の盟約」の 6 人の皇子

皇子	父母	出来事
草壁皇子（第 2 皇子） （くさかべのみこ）	・天武天皇 ・鸕野讃良皇女（天智天皇の次女、持統天皇）	・681 年 2 月、立太子。 ・689 年 4 月 13 日、薨御（27 歳）
大津皇子（第 3 皇子） （おおつのみこ）	・天武天皇 ・大田皇女（天智天皇の長女）	・親友の川島皇子の密告により、謀反の意有りとされ、捕えられ、翌日に自邸にて自害。享年 24。 （謀反は本当か？それに川島皇子が密告したというのは本当か？いずれも疑わしい）
高市皇子（第 1 皇子） （たけちのみこ）	・天武天皇 ・尼子娘（豪族出身、嬪） （あまこのいらつめ）	・高市皇子は母の身分が低かったが、壬申の乱での功績が著しく、政務にあたっても信望を集めていたと推察される。 ・690 年、太政大臣に叙せられる。 ・キトラ古墳の被葬者候補の一人
忍壁皇子（第 4 皇子）	・天武天皇 ・穴人カジ媛娘	・太政官事となり太政官の統括者として、大宝律令の編纂を主宰するなどの政治面での実績を上げた。天

(おさかべのみこ、刑部皇子ともいう)	(ししひとのかじのいらつめ、宮人)	武天皇の最年長の皇子であったことから、最有力の皇族として重んぜられていた。 705年5月7日薨去。 ・高松塚古墳の被葬者と言われている。
川島皇子(天智天皇の第2皇子) (かわしまのみこ)	・天智天皇 ・色夫古娘 (しこぶこのいらつめ、宮人)	・685年、冠位四十八階が施行されると、忍壁皇子とともに浄大参に叙せられた。 ・川島皇子が親友であった大津皇子の翻意および謀反計画を皇太后(持統)に密告したと伝えられる。密告は史実ではないとする見方もある。
志貴皇子(天智天皇の第7皇子) (しきのみこ)	・天智天皇 ・越道君伊羅都売 (こしのみちのきみのいらつめ、夫人)	・叙位や要職への任官記録がなく、天皇の弟でありながら不遇な状況にあったようだ。政治よりも和歌などの文化の道に生きた人生だった。死後に第六男子の白壁王が皇嗣に擁立され即位した(第49代・光仁天皇)ため、天皇の実父として春日宮御宇天皇の追尊を受けた

4-4. 大津皇子の謀反事件

この事件は持統天皇の本質を知る上で重要な出来事と思われる。詳しく調べてみたい。

(1) 大津皇子の人物評

大津皇子は天武天皇の皇子で、才色兼備だった。天武天皇の指示で編纂された『日本書紀』ですら賛辞(*3)が述べられているので、拔群の人物だったと思われる。

*3. 『日本書紀』と『懷風藻』の大津皇子への賛辞

・『日本書紀』には、「威儀高く、風貌は大きく逞しい。言葉はすぐれて朗（あきら）かなり、才学あり、文筆を愛したまう。詩賦の興り（和歌の興り）大津より始まれり」と記されている。

・『懷風藻』（751年の序文を持つ。編者は大友皇子の曾孫にあたる淡海三船と考える説が有力である）には、「度量広大で、博識、〈詩賦の興りは大津より始まれり〉と評されるように漢詩文を得意とし、成長するにおよび腕力強く、文武ともに極めて優れ、また高貴の身をおごらず人を厚く礼遇したので衆望を担っていた人物」と記されている。

(2) 大津皇子謀反事件

○謀反事件までの大津皇子

大津皇子は天武天皇と鸕野讃良皇女の実姉・大田皇女の皇子である。667年頃、大田皇女が薨去する。もし大田皇女が死去していなければ、大田皇女が皇后となり、大津皇子が立太子していたかもしれない。大津皇子は草壁皇子より1歳年下で、その身分は草壁皇子と同じであった。

大津皇子について『日本書紀』には「立ち居振る舞いと言葉遣いが優れ、天武天皇に愛され、才学あり、詩賦（和歌）の興りは大津より始まる」と描かれているが、草壁皇子に対しては何の賛辞も記していない。天武天皇系の草壁皇子の血統を擁護する政権下で作られた『日本書紀』の扱いがこうなのだ。二人の能力差は歴然としており、大津皇子は皇位に就く資格は十分であり、当然皇子を担ごうとする皇族や豪族がいたとしてもおかしくないと思われる。

681年、草壁皇子が立太子する。（少数意見だが、草壁皇子の立太子そのものを軽皇子（のち文武天皇）の即位を正当化するために後世に作為されたとの説もある。）

683年2月、大津皇子が朝廷の政治に参加。血統的に草壁皇子と同格だった大津皇子の政治参加は、この時点で、一応は明確になっていた草壁皇子への皇位継承が半ば白紙化したことを意味するとの説もある。

○謀反事件時の皇子

686年10月1日に天武天皇が崩御するとその翌日の2日に大津皇子と極めて親密な川島皇子の密告（密告について『懷風藻』には記述されているが、『日本書紀』にはこの事件に関する記事に川島皇子の名は出て来ない。）により大津皇子が謀反の疑いをかけられ、3日には捕えられ、自害に追い込まれた。（処刑されたとの説もある。）逮捕された共謀者が30余人で、そのうちの一人（伊豆に島流し）以外は赦されたことから察すると、謀反の計画が事実無根ではなかったにしても誰かに謀られたと捉えるのが妥当だろう。背後で謀議した人物については確かな史料は無いが議論の余地はなかろう。多くの専門家が「大津皇子に謀反の計画はなく、草壁皇子のライバルに対し皇后が先制攻撃をかけたのではないか、その速やかな反応に叡慮を見ることが出来る。」としている。専門家に限らず誰の目にもそのように映るのではなかろうか。それにしても大化の改新以来、同種の事件が延々と繰り返されている。

大津皇子には同母姉・大伯皇女（おおくのひめみこ）がいた。伊勢神宮の斎王（*4）だった。弟への慈愛を母のように注いだ皇女は、その死に臨んで悲嘆に暮れる歌を詠んで、万葉集に残している。

・二人行けど行き過ぎ難き秋山をいかにか君が独り越ゆらむ（巻二・一〇六）

皇子の亡がらは、二上山に移葬された。雄岳頂上には、大津皇子二上山墓が築かれている。

・うつそみの人なる我や明日よりは二上山を弟背とわが見む（巻二・一六五）

（注釈）「いつきのみや」とも呼ばれ、天皇に代わって伊勢神宮に仕えるため、天皇の代替わりごとに皇族女性の中から選ばれて、都から伊勢に派遣された。

*4. 伊勢神宮の斎王

斎王(さいおう)…それは、天皇に代わって伊勢神宮の天照大神に仕えるために選ばれた、未婚の皇族女性のことである。歴史に見られる斎王制度は、天武二年(674)、壬申(じんしん)の乱に勝利した天武天皇が、勝利を祈願した天照大神に感謝し、大来皇女(おおくのひめみこ)を神に仕える御杖代(みつえしろ)として伊勢に遣わしたことに始まる。

4-5. 持統天皇の称制と即位

皇后は、天武天皇崩御後すぐには即位せず政務を執る。実子の草壁皇子の成長を期待していた。しかし 689 年 4 月、草壁皇子が病気により急死したため、皇位継承の計画を変更しなければならなくなった。皇后は草壁皇子と阿閉皇女（あへいこうじょ、天智天皇の皇女）との子・軽皇子（かるのみこ、後の文武天皇）に皇位継承を望むが、軽皇子は幼く（当時 7 歳）当面は皇太子に立てることもはばかられた。690 年、こうした理由から皇后は自ら天皇に即位することにした。即位の後、大赦を行い、大規模な人事交代を行った。高市皇子（*5）を太政大臣に、多治比島を右大臣に任命した。一人の大臣も任命しなかった天武朝の皇親政治は、ここで修正された。

*5. 高市皇子

高市皇子は母の身分が低かったが、壬申の乱での功績が著しく、政務にあたってても信望を集めていたと推察される。

- ・ 690 年 7 月 5 日、太政大臣に叙せられる。以後は天皇・皇太子を除く皇族・臣下の最高位になった。

- ・ 690 年 10 月 29 日、高市皇子は多数の官人を引き連れて藤原宮の予定地を視察した。

- ・ 691 年 1 月 13 日、高市皇子の封が 2000 戸を増し、前の封とあわせて 3000 戸になった。691 年 1 月 4 日、高市皇子の封が 2000 戸を増し、前の封とあわせて 5000 戸になった。

- ・ 696 年 7 月 10 日薨御。平安時代に書かれた『延喜式』諸陵によれば墓は「三立岡墓」で、大和国広瀬郡にあり、東西 6 町南北 4 町で守戸（令制で、天皇・皇族の陵墓を管理する戸）はなし。政権 No. 2 の墓であり、当然守戸があるはずである。守戸が無いということは豪族の墓か？

一方で、キトラ古墳の被葬者を高市皇子、高松塚の被葬者を刑部皇子とする説もある。（『キトラ古墳と高松塚古墳に眠るのは誰だ』を参照）

その即位の前年の 689 年 6 月、前代から編纂事業が続いていた飛鳥浄御原令（あすかきよみはらりょう）（*6）を制定、施行した。

*6. 飛鳥浄御原令

日本古代国家の法典。681 年に天武天皇の律令制定の命令で編纂（へんさん）が開始。天皇は完成前に没。全 22 巻。持統天皇が 689 年に施行したと伝える。内容は 701 年施行の大宝令（行政法）とほぼ同じと推定され、戸籍作成や班田

収授もこの時から6年ごとに作り直すことになったと考えられる。このとき律（刑法）は編纂されず、唐の律をそのまま代用したとの説が有力である。

4-6. 持統天皇の治世

持統天皇は皇后として称制をしていた頃に、飛鳥浄御原令を完成・頒布。律令とは体系的な法典のことで、これは後に制定される大宝律令へとつながる。また、全国を対象とした戸籍・庚寅年籍（こういんのねんじゃく）を作成したため、これにより納税システムのもととなった班田収授の法が全国的に広がった。

持統天皇の治世は、天武天皇の政策を引き継ぎ、完成させるもので、飛鳥浄御原令の制定と藤原京の造営が大きな二本柱である。第一回神宮式年遷宮と新しい京の建設は天武天皇の念願であり、既に着手されていたが、一旦頓挫していた。690年、持統天皇は多数の官人とともに太政大臣・高市皇子に藤原宮の地を視察させて造営を継続した。694年、天武天皇念願の藤原京を完成させて遷都した。

天武天皇の歴史編纂事業を引き継ぎ、律令国家建設・整備政策を遂行した。

天武天皇との違いで特徴的なのは、頻繁な吉野行幸である。夫との思い出の地を訪れるというだけでなく、天武天皇の権威を意識させ、その権威を借りる意図があったのではないと言われる。他に伊勢国に一度、紀伊国に一度の行幸を記録する。

692年3月3日の伊勢行幸では、農事の妨げになるという中納言・三輪高市麻呂の諫言を押し切った。この行幸には続く藤原京の造営に地方豪族層を協力させる意図があったと指摘される。

持統天皇は、柿本人麻呂（*7）に天皇を賛仰する歌を作らせ、天武天皇とともに自らを神として崇めさせた。柿本人麻呂は官位こそ低かったものの、持統天皇から個人的庇護を受けたらしく、持統上皇が崩御するまで「宮廷詩人」として天皇とその力を讃える歌を作り続け、その後は地方官僚に転じた。

*7. 柿本人麻呂

【『万葉集』第一の歌人といわれ、長歌19首・短歌75首が掲載されている。後世、山部赤人と共に歌聖と呼ばれ、称えられている。三十六歌仙の一人である。代表作の1つが

「東の 野に炎の 立つ見えて かへり見すれば 月傾きぬ」（ひむがしの のにかぎろひの たつ みえて かへりみすれば つきかたぶきぬ）通釈は「東方の野に、あけぼのの光のさすのが見えて、ふりかえてみると、（西の方に）月は傾いている」

である。有名な「あしひきの山鳥の尾の長々…」で始まる歌は詠み人知らずで、人麻呂作というのは誤解だそう。

因みに、人麻呂が西国に朝廷の使者として赴き、讃岐国の中の水門（現丸亀市金倉川河口付近）から船出して都へ向かう途中、風波を除けるために沙弥島（しゃみじま、香川県坂出市）に立ち寄り、そこで詠んだ長歌は「玉藻よし 讃岐の国は 国柄か 見れども飽かぬ（玉のような藻の美しい「讃岐の国」は国の由来ゆえか、見ても飽きないことだ。）」で始まる。地元では親しまれていて、校歌に「歌聖（人麻呂）が 昔たたえたる 青潮むせぶ 瀬戸の海…」を入れている高校もある。

柿本人麻呂碑



柿本人麻呂の詠んだ和歌の心を後世に伝えるため、地元坂出市出身の作家・中河与一氏（著書；「天の夕顔」他）が1936年11年に建立した「柿本人麻呂碑」が沙弥島にある。】

4-7. 外交政策

外交では前代から引き続き新羅と通交し、唐とは公的な関係を持たなかった。新羅に対しては対等の関係を認めず、向こうから朝貢するという関係を強いたが、新羅は唐との対抗関係からか、その条件をのんで関係を結んだようである。日本からは新羅に学問僧など留学生が派遣された。

4-8. 文武天皇への譲位

持統天皇の統治期間の大部分、高市皇子が太政大臣についていた。高市は母の身分が低かったが、壬申の乱での功績が著しく、政務にあたっても信望を集めていたと推察される。公式に皇太子であったとか、そうではなかったが有力候補と擬せられていたのではないかとの説がある。

その高市皇子が 696 年 7 月 10 日に薨去した。天武天皇には、草壁皇子以外にも母親の違う皇子がほかにいた。「吉野の盟約」を契った 6 人の皇子のうち、天武天皇の皇子は 4 人だが、それ以外に長皇子や弓削皇子等の 6 人の皇子がいた。成長した彼らは、草壁皇子の薨御後皇位につくことを期待したものの、持統天皇の即位によって阻まれていたが、高市皇子の死去に伴い、持統天皇の次の皇位は新たなチャンスとなった。

『懷風藻』（撰者未詳。751 年の冬に撰。日本最古の漢詩集）によれば、持統天皇の後をどうするかが問題になり、持統天皇が皇族・公卿・官人を宮中に召して皇太子の擁立について議論させた。古来、皇位継承については兄から弟へと行われるべきという考え方と、親から子・孫へと行われるべきという考え方があるが、実際には兄弟間での皇位継承の実例が多かったのだ。それぞれが自分に都合の良い意見を言い合い、議論は紛糾した。第 9 皇子・弓削皇子（母：両親が天智天皇である大江皇女）がこの時、同母兄の第 7 皇子・長皇子が皇位を継ぐことの正当性を主張しようとしていたが、葛野王（天智天皇の孫、大友皇子の皇子）は前に進み出て直系による皇族継承を主張した。人を介して「入れ知恵した」のだとする意見もある。葛野王の発言が決め手となって 697 年 2 月、軽皇子が当時としては異例の 14 歳の若さで皇太子になった。このことで葛野王は持統天皇から称賛されたという。697 年 8 月、14 歳の軽皇子に譲位し、太上天皇となり、軽皇子は文武天皇となる。

4-9. 譲位後の持統天皇

譲位した後も、持統上皇は文武天皇と並び座して政務を執った。文武天皇時代の最大の業績は大宝律令の制定・施行だが、これにも持統天皇の意思が関わっていたと考えられる。しかし、壬申の功臣に代わって藤原不比等ら中国文化に傾倒した若い人材が台頭してきた。

701 年、持統上皇はしばらく絶っていた吉野行きを行った。702 年には三河国まで足を伸ばす長旅に出て、壬申の乱で功労があった地方豪族をねぎらった。

4-10. 崩御

702 年 12 月 13 日、病を發し、22 日に崩御した。宝算 58。1 年間の殯（もがり）の後、火葬されて天武天皇陵に合葬された。天皇の火葬はこれが初の例であった。

○持統天皇 檜隈大内陵（じとうてんのうひのくまのおおうちのみささぎ）



©宮内庁

■代 数	:第41代
■天 皇 名	:持統天皇 (じとうてんのう)
■御 父	:天智天皇
■御 母	:嬪蘇我遠智娘
■御 陵 名	:檜隈大内陵 (ひのくまのおおうちのみささぎ)
■陵 形	:円丘
■合 葬	:天武天皇と合葬
■所 在 地	:奈良県高市郡明日香村大字野口
■交通機関等	:近鉄「飛鳥」下車 東へ0.8km
■陵印保管場所	:畝傍陵墓監区事務所

5. 最後に

持統天皇の謎

最初の仮定を否定される史料は見つからない。勿論、明確に肯定できる史料もない。

大海皇子が吉野に隠棲するときにも同行し、終始夫を支え、夫・天武天皇の治世の際には、助言や助力を惜しまず、補佐という立場を越えないよう支え続けたとされる。常に政事にも関与し、後継に関しては持統天皇の意向が強く働いたであろう。

持統天皇は自ら望んで天武天皇の墓に合葬された。

二人は仲睦まじく、死後も共にあった。

持統天皇は度量もあり、政治的手腕も並外れていた。政事に深く関与しており、後継問題については主導した。「我が子を何が何でも天皇にしたい」という欲求を達成するために全能を注いだのだろう。幼少の頃、祖父が謀略と裏切りにより、ちょっとした油断で粛清されたことで、妻子らが困窮する厳しい時代であることを知っていた。我が子が勝者の側を歩くことを願い、そのためには皇位に就かせることがベストと考え、あの手この手を駆使して達成した。

また、歌聖・柿本人麻呂を庇護し、天武天皇や持統天皇を崇める歌を作り続けさせて、天皇の権威を高めることに努めた。演出家でもある。

持統天皇が「何が何でも我が子・草壁皇子を天皇にしたい」との思いは草壁皇子を産み、姉・大田皇女が死没した頃からであろうか？父親の天智天皇が崩御した後に夫・大海皇子が即位すれば自分が皇后になることができ、草壁皇子を天皇に就けることができるのだ。天智天皇の皇后・倭姫王には子女はいないし、第1皇子・大友皇子の母親は地方豪族出身で、皇位に就く資格はないと思っていたので、大海皇子の天皇就任が実現するものと期待していた。しかし、意外なことに天智天皇は後継に大友皇子を選んだのだ。

夫・大海皇子、そして我が子・草壁皇子は血筋からして大友皇子より皇位に就くのにふさわしいと考え、クーデターを起こしてでも皇位に就くように夫・大海皇子に働きかけたとしても不自然ではない。

- ① 「義弟・大友皇子を倒し、夫・大海皇子を即位させ、自分が皇后になる。」
吉野行き、東国行きにも同行し、ともに謀るとあるので、天武天皇のブレーンであったと容易に推測できる。後の流れを見ると皇后が強く意図したと容易に推測できる。
- ② 「卑母拝礼禁止の詔を大海皇子にささやき、発令してもらった。」
母親が地方語族出身の娘の長男・高市皇子を後継者から除外するのが目的なので皇后には意義があるが、天武天皇がこれにこだわる必要はない。皇后の差し金である。
- ③ 「吉野の盟約で皇后の子で次男・草壁皇子を次期天皇であると皇子たちに宣言する。」
皇后にはとても意義のあることだ。が、後に天皇は有能な大津皇子を政治に参加させている。皇后の主張に一度は同意したが、後継者選定には迷いがあったのだろう。
- ④ 「草壁皇子が病で急逝した後、孫の軽皇子を即位させることに切り替え、天武天皇が崩御したときに間髪を置かず、皇位継承の資格のある大津皇子（母親：大田皇女）を謀議により謀反の疑いをかけて排除する。」
大津皇子の排除については議論の余地が無かろう。
- ⑤ 「軽皇子は7歳であり、即位することはまだ無理なので、他の後継候補を除外するために、自ら即位する。政権の安定を図るため人望のある高市皇子を囲い込むことにして太政大臣に任命する。」
元々即位することは想定外だったが、やむを得ず臨機応変に対応したのは明らかである。人望のある高市皇子を太政大臣に任命し、囲い込むととも政治の安定を図ったのは当然であろう。

- ⑥ 持統天皇の次期天皇を話し合う場を設定し、孫・軽皇子を後継者にするために事前に手を打ってシナリオ通りに事を運んだことは疑いの余地が無からう。

計画通りに軽皇子に譲位し、軽皇子は文武天皇となる。自らは初の太上天皇（上皇）になり、譲位した後も、持統上皇は文武天皇と並び座して政務を執った。

持統天皇は念願だった孫・文武天皇を即位させた。しかし、想定外だったのは、蘇我倉山田石川麻呂系に妃に相応しい女性がいなかったことである。身内の権力闘争で、一族が減少してしまった結果であろう。

台頭してきた藤原不比等（藤原鎌足の次男）が娘・宮子を文武天皇の夫人にしていた。701年、その宮子に首皇子が生まれ、今後、藤原家が隆盛していくことが容易に想定された。

持統天皇は老体に鞭打って死の直前まで長旅に出て、天武天皇系の天皇家の繁栄と蘇我倉山田石川麻呂系の繁栄を願って、「壬申の乱」に功労のあった豪族たちへの働きかけに尽力した。

724年、首皇子が文武天皇として即位後、光明子が皇后となる。持統天皇の努力も空しく、天皇の皇后、妃、夫人は蘇我倉山田石川麻呂系から藤原家にとって代わられてしまった。

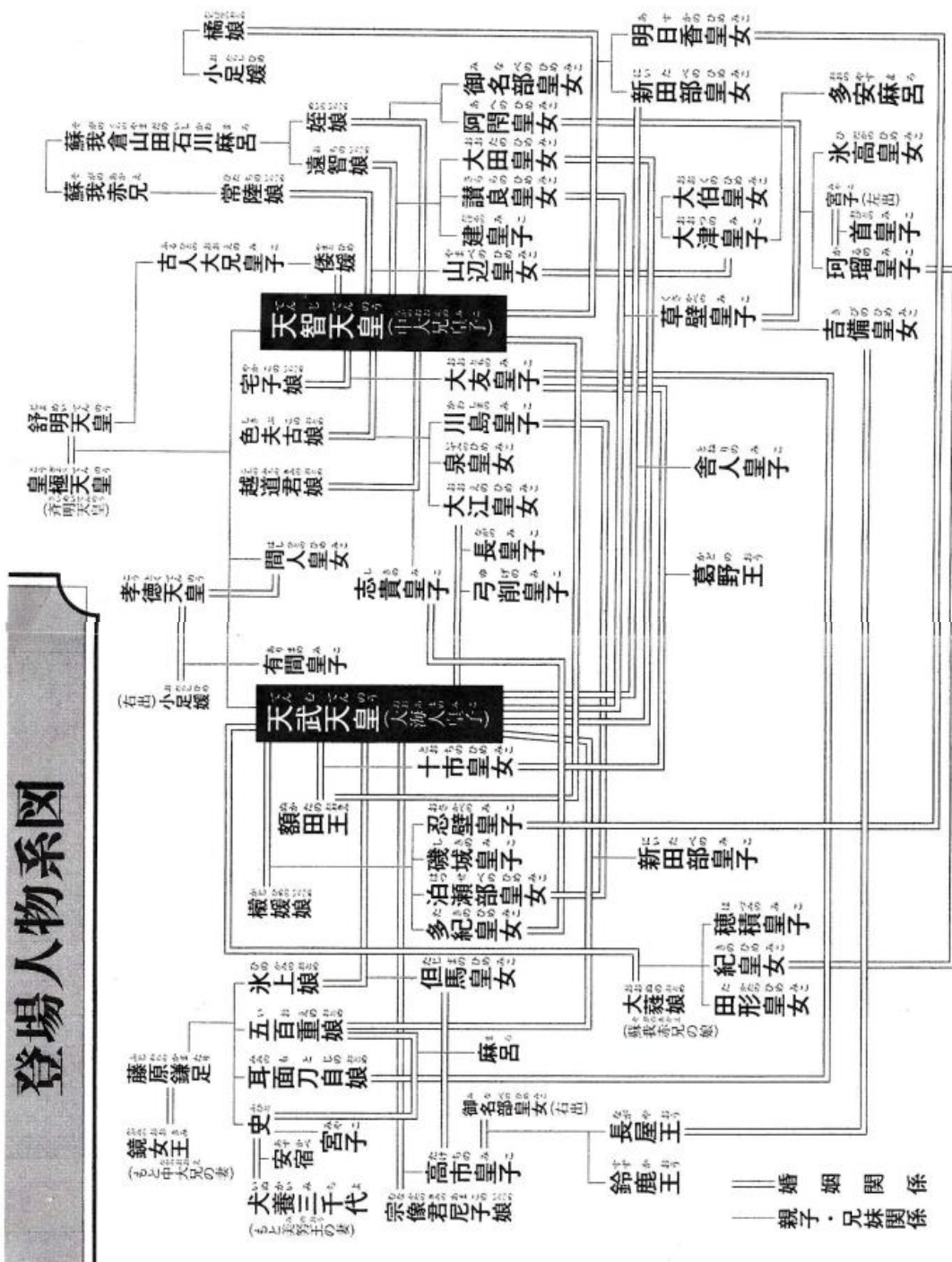
文武天皇の孫・孝謙天皇の代で天武天皇の皇統は途絶えて、天智天皇の皇統に変わり、天智天皇の孫・光仁天皇が即位した。天武天皇には10人の皇子と7人の皇女がいたが、その多くが後継者争いで排除されたためであろう。

「壬申の乱」で天智天皇側についた藤原家は乱での敗戦により没落しかけたが、権力欲の権化と云われた不比等の野望により見事復権し、藤原家は天皇の外戚として栄えていくことになる。

参考資料

- ・「日本書紀」
- ・永井路子著：「女帝の歴史を裏返す」
- ・里中満智子著：「天上の虹」
- ・ウィキペディア

添付資料「天智天皇と天武天皇の系図」（「天上の虹」の登場人物系図）



なかの おお
《中大兄の妻たち》

なかの おお え
《中大兄の子供たち》

